

歩兵屯所医師取締手塚良斎政富

深瀬泰且

はじめに

幕末に軍医として活躍した歩兵屯所医師取締手塚良斎については、すでに報告した⁽¹⁾。良斎の筆になる『医学所御用留』⁽²⁾（以下『御用留』という）にふせられた前附によって良斎の略歴をしり、その本文から歩兵屯所医師としての活躍をこく簡単にえがきだした。また「堀内文書」におさめられた堀内忠迪あての書簡から、開業医としての生活や、蘭学の習得についてしることができた。

その後『御用留』を詳細に検討し、ほかに二、三の史料を披見することによって、いくつかの新知見をえたのでここに報告する。

長崎遊学と京都除痘館

手塚良斎は嘉永元年（一八四八）二五歳のときに、蘭学を学ぶために長崎におもむいた。長崎滞在中、嘉永二年に脚氣をわずらった。その時の様子を、坪井信良が実兄佐渡三良にあてた嘉永三年の書簡にみると、

(モーニッケは) 格別学力之アル様子テモナシ。ト申ハ、同人昨年長崎滞留中ニ小子ノ知己之人医生(元姓内村、信州之人也、手塚良齋事也。元稜子モ知ル人ナルベシ) 長崎ニテ脚氣ヲ患申候故、幸右等之治法新奇ナル事モヤト存シ施法相願申候……⁽³⁾

とある。治療をたのまれたモーニッケは、日本流に煎薬だけを投与したので、その薬品の名前や病名をただしたところ、「病氣直リサエスレハヨロシ、薬品病名等ハ知テモ益ナシ」といって、たいそう腹をたてたということであった。さらに同じ質問をくりかえしたところ、病名は“Verlamning” (麻痺) とのべただけで、薬品の名はついに教えてくれなかったという。おそらく治療もうまくゆかなかつたのではないだろうか。

良齋は嘉永二年の初冬、長崎遊学をおえて江戸への帰国の旅についた。良齋が京都についたのは一〇月一二日のこと、このころ長崎に痘苗をうけとりによくため、福井をたつて京都にいた笠原良策とこの日に京都であつている。笠原良策の『戦兢録』に次のような記述がある。

十二日(嘉永二年一〇月) 晴……今日手塚良齋自下関到……

良齋はその翌日も良策にあり、京都をはなれるまで前後四回も会つている。

十三日 晴……夜之錦洞遇手塚良齋云云 水戸藩中人也 歳三十余 随坪井氏四年 在崎陽二年 学崎陽及佐賀接白神

法 且接蘭人モンニツキ三入唐館……妹嫁大月春齋 今業成而帰也……

良齋が水戸藩の医師であつたという記録はない。義父手塚良仙光照が、水戸の支藩である常陸府中藩松平播磨守につかへていたのでこのような記述をしたのであろう。この年良齋は二六歳であつたのだが、良策には「歳三十余」とみえたのは、あるいは良齋が年よりも老けてみられていたからであらうか。

良齋が長崎において学んだ師についてしるした文書はない。この書簡からは、あるいはモーニッケについたともいえようが、これは蘭館(さきの唐館は蘭館の誤りと考えられる)におもむいて、モーニッケに三度教えをこうたと解釈した方がよ

いだらう。オランダ医学を学ぶとともに、長崎や佐賀で種痘術を身につけたとある。この日は牛痘苗輸入の苦心談や、モ
ーニッケの牛痘接種法について話はずみ、二人がわかれたのは夜中の一二時をまわっていた。

このころ笠原良策は、その師日野鼎哉とともに、京都除痘館の開設にいそがしかった。嘉永二年モーニッケによつても
たらされた牛痘痂によつて、楯宗建が牛痘の接種に成功し、以前から良策の依頼をうけていた頼川四郎八が、この痘痂
を京都の日野鼎哉に早飛脚でおくった。たまたま藩命をおびて長崎に痘苗をもとめて旅立った良策が、京都の恩師を訪れ
て、痘痂入手の朗報を耳にしたのである。

そこで鼎哉、良策らは痘苗を確保するために、京都に除痘館をひらくことを決意し、これが開設のはこびになったのは
一〇月一六日のことであつた。

十七日……良斎氏曰接人痘而不感者 浴温湯而始発者屢有之 又曰 在崎陽与高嶋氏等謀譯 「ラーフルスタラーテ

ンセーアルチエルレイ」勅シテ為十二卷又譯モスト梅毒篇一卷 右各東帰後写而贈申候……

良斎は人痘接種について不善感者の扱いをのべて、豊富な経験の一端をのぞかせている。長崎に滞在中に訳したという砲
術書の原書は、J.P.C. van Overstraten があらわした “Handleiding tot de kennis der artelerie” (1850) であるとおもわ
れる。大島圭介が訳して『砲科新論』（文久元年刊）として出版され、一方同じタイトルの別の砲術書が、『砲術訓蒙』
（木村軍太郎訳 安政元年刊）『砲術新篇』（山中教聖訳 慶応元年刊）として刊行された。良斎らもこれを訳して剗腕にふし、
一二巻本として出版したとよめるが、兵書目録などにこれを見ることはできない。

一方モスト梅毒篇は、“Encyklopädie des gesammten medicinischen und chirurgischen Praxis” (1836~1837) のうちの梅
毒の項目を訳したものである。これらの蘭書を訳したとのべているのは、良斎がかなりオランダ語に通じていた事実をし
めすものである。

良斎が京都をはなれたのは、嘉永二年一〇月下旬であつた。笠原良策、桐山元中連名で、良斎にあてた一一月一六日づ

けの書簡⁽⁵⁾に、「分袂已来屈指已二旬余」とあることよつてこれがわかる。『戦兢録』には、一〇月一八日夜良策が良齋を訪問したがあうことはできなかつたとあり、この日を最後として『戦兢録』から良齋の名はきえてしまふ。記念すべき京都除痘館の開館の日に、良齋は京都に滞在しているので、その有様を自分の眼でたしかめているかもしれない。

この書簡は江戸にかへった良齋にたいし、良策から牛痘苗にそえて送ったもので、うけとつたら早速接種して、その善感、不善感を報告してほしいと申しられるとともに、さきに師の日野鼎哉が約束したとおり、この痘苗を伊東玄朴、竹内玄同、渡辺春汀にも分けてほしいとのべている。痘苗が江戸の伊東玄朴の手にわたつたのは、嘉永二年十一月鍋島侯の出府のさい、島田南嶺が佐賀からもたらしたといわれているが、これとは別のルートで、京都の日野鼎哉から玄朴に伝苗されたことをこの書簡は教えている。

この書簡の前半には、良齋が京都で勇み足をしでかしたことにたいし、笠原良策らがその経緯をくわしくのべて、師家に面目がたつようにしてほしいと詰問している。

……御会面ノ節、未越前へ伝苗不相濟候儘、当地にて御開之事ハ、必御無用と反覆申上候ニ、長柄家ニテ、貴君其児ニ竊ニ接痘被成候由、菓舖小林安兵衛等申触レ候故、不佞等対師家甚不行届之、御応対を申賛シ候様にて、殆困り入申候、此義早速御糺シ被下、不佞等対師家、申訳相達候様、御処置可被成下候……

ここにある長柄家とは、のちに有信堂社中の人となる長柄春竜⁽⁷⁾（三條通西洞院西入町）をさすのであろう。ちょっとしたトラブルがあつたようであるが、良策らは約束どおり、痘苗を江戸の良齋のもとに送つた。

『御用留』では、良齋が長崎遊学から江戸にかへつたのは、嘉永三年であるとしているが、この書簡をみるかぎり、嘉永二年一月中旬には江戸にたちかへつたものといえよう。

歩兵屯所医師としての良齋

文久三年三月あらたに設立された歩兵屯所の附属医師として、良齋は戸塚静甫、千村礼庵らとともに医学所医師から出役勤務を命ぜられ、一五人扶持を給された。ついで七月にいたり、戸塚静甫、吉田策庵、高島祐啓らとともに、同所医師取締に抜擢された。当初四ヶ所にあった歩兵屯所での医師の勤務は、一ヶ月交代の輪番制であったが、これではことのほか迷惑をこうむるとの病兵からの訴えもあり、病兵を治療するうえでも適当でないので、同年一月からそれぞれの屯所に、医師を専属させるように変更されたが、良齋ら四人の医師取締が一定の屯所を担当した様子はみられない。

水戸天狗党の乱（元治元年）や、將軍家茂の第二回の上洛（文久三年）にあたっては、歩兵組があつたしく出動し、それに附属して屯所附医師が同行しているが、良齋は江戸にとどまって、その留守をまもっていた。良齋が歩兵組とともに江戸をはなれたのは、慶応元年家茂の第三回の上洛に扈從して、京都におもむいたときのことである。

家茂が江戸を進発したのは、慶応元年五月一六日であるが、良齋はおくれて閏五月四日に江戸を出発した。これにさきだつて五月一五日、江戸城の躑躅の間において、老中本多美濃守忠民、若年寄土岐山城守頼之、同立花出雲守種恭、増島河内守立合いのもとに、御番医師並をおおせつけられ、二〇人扶持をたまわつた。このとき吉田策庵ら医師取締三人も、良齋と同様に御番医師並に昇進した。進発にさいして取締の高島祐啓と良齋が御供を命ぜられ、祐啓は三番町歩兵組、良齋は小川町歩兵組の附属として、手当金のほかに人足四人、馬一疋をくだされた。

五月一六日に江戸を進発した家茂は、途中天竜川増水のための川どめなどがあつて、京都の二条城についたのは閏五月二二日のことで、実に三五日を経過している。良齋が江戸をたつたのは閏五月四日で、後詰めとして出陣したものとおもわれる。木曾川の洪水などにあつて、大坂についたのは六月二二日のことで、四七日を要している。江戸から京都までの道程は、普通一四〇五日の行程であるので、たとえ人数のおおい行列とはいえ、この日数は異常におおいいえよう。の

ちのべるように、良齋が病兵をひきつれての大坂から江戸への行程は、わずか一八日しかかかっていない。

大坂についた良齋は、六月二四日陸軍奉行、歩兵奉行に到着したむねの申告をおこなった。同じ日、兵隊一同に暑氣払いをくださるむねの通達がだされ、次のような処方薬剤がくばられた。

批把葉 壹斤 藿香 小半斤 桂皮 小半斤 丁字 十匁 莪朮 十匁 香薷 小半斤

右一劑となし一大隊江半劑ツツ二大隊一劑被下の事

良齋の大坂での宿所は、上本町八丁目寺町にある源光寺内に設けられた病院の一隅であった。

慶応二年の正月を、良齋は大坂でむかえた。元日には大坂城に登城して、將軍にお目見えがなかった。

朝五ツ時登城於大広間年首為御礼 四ツ半時出御 御目見 被仰付の事

但ッ陣羽織着用之事

長州征伐の軍が発令されて、良齋もいよいよ広島へくだることになる。七月七日次のような申しわたしがあつた。

手塚良齋江

芸州広島表江出張可致旨伊賀守殿被仰渡依之申渡

この書類を陸軍奉行溝口伊勢守勝如からうけとつた良齋は、九日仮役所において七、八、九の三ヶ月分の手当金二七兩二分と、一五兩三朱と錢四〇五文の旅御扶持を支給された。二〇兩の薬価を前借りして、七月一二日朝快風丸で大坂八軒屋を出発して、玉島湊で一泊し、二〇日広島沖の宇品島について、小舟にのりかえて広島に上陸した。翌二一日、広島著到を陸軍奉行竹中丹後守重固、歩兵奉行河野伊予守通仰に申告した。

六月すでに対長州戦の火蓋はきられていたので、広島市内に開設された六ヶ所の病院には、傷病兵が次第にその数をまし、急に全快しそうもない病兵は後送されることになって、総数七七名の病兵が八月二三日に江戸送りと決定された。しかしそれ以前に家茂死亡が発表されて長州征伐は中止とときまり、全軍の撤収が布告された。

広島撤退にあたって良齋は、そのころ陣中で病をえていた老中水野出羽守忠誠につきそって、九月一日紀伊藩の軍艦明光丸に乗船して宇品港を出帆し、一七日夕刻に大坂の天保山沖についた。出羽守の本陣である北浜二丁目の増屋孫左衛門宅に出羽守をおくりとどけ、良齋は伝光寺にはいった。

一〇月四日良齋は三番町、小川町両屯所の病兵一一九名をひきつれて大坂を出発した。その道中先触れが『御用留』にみえる。

御用先觸

陸軍附御醫師取締

手塚良齋

一被下人足

四人

一被下本馬

老疋

此訳人足貳人ニ直し

内引戸駕籠

老挺

此人足三人

〃兩掛

老荷

〃 〃 老人

〃宿加籠

老挺

〃 〃 貳人

外ニ御用長持

老棹

右者明四日大坂表出立歩兵方病人差添江戸表江被罷下_レ條得其意宿々人馬無差支継立可被申_レ以上

御番醫師並

陸軍附取締

手塚良齋内

寅十月三日

今里和市印

従大坂東海海^て道筋

品川筋迄

宿々

問屋中

当御泊り左之通

牧方

伏見

草津

水口

龜山

桑名

宮

岡崎

白須賀

見附

嶋田

府中

吉原

三島

小田原

藤沢

川崎

此先触品川宿ニ至リ^ぬハハ別段人夫を以江戸下谷練堀小路屋敷迄早々相届可給^ぬ以上

良齋が江戸についたのは一〇月二一日であつた。慶応元年閏五月に將軍家茂の上洛にしたがつて上方におもむいて以来、一七ヶ月ぶりに江戸の土をふんだことになる。

將軍の代替りにさいしては、御抱医師たちが薬を献上することになつていたので、一月二日良齋は次のような丸薬を献上した。

奇効丸

广香^マ 一分

竜腦^マ 一分

阿仙薬 二匁

甘草末 一匁

丁香

五分

能書

一治気鬱

一治天氣眩暈

一治留飲腹痛

一治霍乱吐瀉

一治仙積

右一度二十五粒ツツ白湯ニテ送下^マ

屯所附医師の辞任と維新後の良齋

医師が剃髪することは長い間の慣例であったが、文久二年になって医師の蓄髪許可令が発せられた。⁽⁸⁾良齋は慶応三年正月、「頭冷ニ付蓄髪仕度」との願い書を提出していたところ、六月二〇日にいたって蓄髪無附の頭髪でさしつかえないむねの許可がおりた。しかしこれもわずか半月後に、「逆上強く眼病相煩何分蓄髪仕兼のニ付」再び剃髪で出仕したいむねを申しでて、その許可をえている。

慶応三年も歩兵組の活躍は目ざましいものがあるが、『御用留』には良齋自身に関する記事はほとんどみられず、良齋は江戸をはなれることはなかった。一〇月二二日からは、「腰足痛不出来ニ付引込養生致度」との届書をしたため、月番戸塚静甫に提出して家に引こもって治療することになった。それにつづく記事は十一月一日まで空白であるので、この引込養生がいつまでつづいたかは不明だが、二〇日ばかりは家に引こもっていたのかもしれない。

慶応四年正月の鳥羽伏見の戦いについては、わずか一行しかふれていない。正月一二日慶喜が海路江戸にかえり、歩兵組附属の医師の江戸帰府の模様の記載はあるが、時局の重大さにくらべるとあまりにすくなすぎるし、それもあまりに淡淡としている。

四月一日官軍が江戸に入城して、徳川幕府二七〇年の治政がここに終りをつげる。四月一八日の良齋の辞表をもつて、『御用留』の記事はおわる。

私儀一昨年中久々傷冷毒にて腰足痛相煩程々療養仕の得共只今以テ全快不仕時期之転変ニ依リ右痛再發仕起居動揺難義罷在押て出勤罷在の得共急ニ全快之程も不束覚ニ有之當御時節柄却て奉恐入の義ニ付歩兵屯所附醫師取締被仰付被下の様此如奉願上の以上

辰四月

松平太郎殿

あて名の松平太郎正親は陸軍奉行並の職にあり、のち江戸を脱出して五稜郭にこもった。この辞表は月番高島祐啓をへて、松平太郎に提出された。四月晦日にいたり、御役御免になるむねが申しわたされた。

歩兵屯所医師を辞任後、良齋は日本橋元大工町（現在の中央区八重州一丁目、日本橋二丁目）で開業医生活をはじめた。さきに横浜に仮設された軍陣病院は、東京下谷の藤堂邸に移転して大病院と名をあらためていた（慶応四年七月二〇日）が、良齋は九月一〇日石井謙道、渡辺栄仙、塩田順庵らとともに、この大病院の医師に任命され、徳川幕府から一転して明治新政府につかえる身となった。それもつかの間、十一月四日にはこの大病院医師を辞任してしまう。⁽⁹⁾⁽¹⁰⁾

現在までに披見しえた史料に記載されている良齋の居宅は、(一)嘉永二年、長崎遊学からかえって、私塾をひらき医業をいとなんだ下谷松永町。これは太田東海の弟太田道博が文久年間に通学していた良齋の私塾の住所でもある。⁽¹¹⁾(二)慶応二年、大坂から帰府にさいしての先触れにしるされた下谷練塀小路。江戸切絵図の下谷絵図にも、大槻俊齋の南隣りに良齋の名がみえる。(三)慶応四年幕府瓦解のさい、歩兵屯所附医師取締を辞任したときにすんでいた日本橋元大工町。『御用留』前付（明治三年）にもここにすんでいると記している。これによって三ヶ所の住所をすることができたが、これだけの史料では、これを経時的にとらえることはできないので、今後の研究にまたなければならぬ。

良齋の私塾において修業したものは、さきの太田道博が安政六年二月から、文久二年二月までの三年一ヶ月にわたって指導をうけているほか、歩兵屯所医師手伝として弟子の内村有庵、津山良策、林榮春の三名が勤務したと『御用留』にはしるされている。

手塚良齋の墓碑銘

良齋の墓は松竜山總禪寺（東京都豊島区巢鴨五―三二―二 曹洞宗）にある。本家筋にあたる手塚良仙と、義兄にあたる大槻俊齋の墓にはさまれるようにしてたてられている。

墓碑の正面には妻にあたる手塚良仙光照の次女秀の名も刻まれているので、秀の死亡（明治二八年六月一日）後に建立されたものとおもわれるが、その碑銘は明治一一年秋九月となっている。

君諱政富信州更級郡川中嶋今里村人也本姓内村氏父曰總兵衛
政弘母深美氏生九男二女君其第五子秀字千吾甫九歲寄食江戸
之疏属年十八始志醫術入手塚良仙之門改名良齋後三年以師命
冒姓手塚尋遊于長崎就蘭人某而学焉由是醫業益進年二十八開
業於江戸娶師之二女後六季舉一女不幸早世終復無子君初仕伊
達若州侯為待醫文久三年三月幕府命為歩兵屯所醫師慶應元年
五月為番醫師並給二十人口明治元年二月改祿百石是歲実當維
新之際乃辭幕府力食於坊間既而新政府創病院君在醫員中頗盡
力然未幾辭而復力食其四年四月歸藩于静岡為二等勤番組八年
九月六日病歿享年五十有二葬於東京駒籠總禪寺無嗣以妻手塚
氏為主後其祭主則手塚秀也

明治十一年秋九月 矢村宣昭撰 中根聞書 井龜泉鐫

墓碑銘から新しい事実とおもわれるのは、明治四年四月に静岡におもむいでいることであるが、静岡病院や沼津病院の

関係者の中に良齋の名を見出すことはできなかった。

おわりに

『医学所御用留』を中心に、手塚良齋の歩兵屯所附医師としての活躍をのべた。幕末から明治へと社会変革の渦にまきこまれ、幕府の下級医師から、一たびは新政府にその職をえながら、志をとげることができなかった一人の蘭方医の姿をかいまみることができた。

稿をおわるにあたりご指導、ご校閲をたまわった順天堂大学酒井シヅ助教授に感謝する。また種々ご教示をいただいた東京大学史料編纂所金井圓教授、東京都公文書館熊井保先生、摠禅寺住職山田訓康氏に感謝の意を表する。

引用文献

- (1) 深瀬泰旦 歩兵屯所医師取締 手塚良齋と手塚良仙 日本医史学雑誌 二五卷 二九〇頁 昭和四四年
- (2) 手塚良齋 医学所御用留 明治三年 順天堂大学山崎文庫蔵
- (3) 宮地正人編 幕末維新風雲通信 東京大学出版会 東京 昭和五三年 二九頁
- (4) 笠原良策 戦説録 福井県医師会 福井県医学史 昭和四三年 五二七頁
- (5) 同書 一九一頁
- (6) 伊東栄 伊東玄朴伝 玄文社 東京 大正五年 八五頁
- (7) 京都府医師会 京都の医学史 思文閣出版 京都 昭和五五年 九二五頁
- (8) 深瀬泰旦 歩兵屯所の医師たち——『医学所御用留』から 日本医史学雑誌 三一巻 三七二頁 昭和六〇年
- (9) 日記 明治元年 明治初年医史料 中外医事新報別刷 日本医史学雑誌 昭和一八年(複製版) 思文閣出版 京都 昭和五四年 六一頁
- (10) 同書 八一頁
- (11) 医者履歴明細書 明治八年 田村家文書 川崎市蔵

(東京慈恵会医科大学講師 順天堂大学医学部医史学研究室)

Tezuka Ryosai, Army Infantry Regiment

Chief Medical Officer (Further Report)

Yasuaki FUKASE

Tezuka Ryosai took classes in Dutch studies and medicine in Nagasaki in 1848 and 1849. On returning to Edo, he met with Kasahara Ryosaku in Kyoto and had a discussion on vaccination with him. Ryosai was a good student of the Dutch language, so was able to translate J.P.C. van Overs-traten's monograph on artillery and G.F. Most's textbook on syphilis.

In 1863 he was appointed as the medical officer to the infantry regiment with fifteen nin-buchi of salary. According to his "Igakusho Goyodome" (Memorandum on Medical School of Edo), he was later promoted to the rank of supervising-doctor. In the Meiji era, he took a position as a doctor at the Dai Byoin and after his resignation he worked as a practitioner for the rest of his life.